
妖狐玉藻外伝-雪の恋路は冷たく甘く-

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖狐玉藻外伝 - 雪の恋路は冷たく甘く -

【Nコード】

N4789Q

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

冬の時期。妖狐の玉藻烈狐丸は、修行の為に雪山へと訪れた。しかしそこでハプニングが起きて――。今回は挿絵を導入しました。

起（前書き）

どもです。今回は挿絵を加えてみました。そしてタイトルが妖狐玉藻外伝というように、妖狐玉藻伝と繋がりがある内容となっています。とはいえ、これはこれで一つの物語となってますので、これを機会に本編にも興味をもっていただけたら幸いです。

起

冬になると、雪山のスキー場には多くの人が集う。また地域によつては雪だるまを作ってみたり、雪合戦をする場所もあるだろう。楽しみがある一方で、道路は凍り付き車などの交通には危険が伴い。屋根には雪がのし掛かり、雪を退かすのに苦労するなど、苦難が待ち受けている。

雪が降り積もる限りは、春が来るまでは、人々は冬の苦楽を味わう。

> i 1 7 4 1 9 — 2 9 1 <

そんな人間達と暮らしている妖狐、玉藻烈狐丸は、冬の月になると人里離れて人間の住みにくい環境へと身を置く。極寒の地へと。

わざわざ都会から赴くには理由がある。彼は妖怪のマジシャンである妖狐の生まれにも拘わらず、妖術よりも格闘技に携わる。修行僧以上の努力家である。時代は平成になった現在でも武と心の鍛練をと、普段は気さく且つ陽気ながらも根が武道家気質な彼は、稲荷大明神の勧めでこの地へと足を運んだ。

大明神の知り合いである山の神の許可をもらい、修行の場として雪原広がる世界にて、烈狐丸は悠然と佇む。

両脇を締め、呼吸を整え始めた。

達人の呼吸は、常人の深呼吸よりも深く、そして空気を震わせる。周囲の生命の耳朶までも身と共に震わせるのだが、烈狐丸からは倍の威圧感が放たれていた。

千年……中国拳法の歴史には及ばないが、しかしそれだけの功夫を烈狐丸は積み重ねてきた。彼という命が作り上げた信念に生きる

歴史は、代々受け継がれる事よりも石積みは強固であり、また貫徹した初志は山よりも遙か高見へと上り詰めていよう。それでも頂への道はまだまだ険しい。常に精進せねばと、今日も烈狐丸は己を鍛えるのだ。

呼吸を整えた彼は、静かに手を翳し、緩やかに正拳の姿勢に入り瞳を閉じた。冷気を載せた風が、頬を撫でる。動物もいない森に囲まれた広場で、烈狐丸は構え維持する。妖狐でありながら、雪月が灯す白一色の地に立ち尽くすその姿には、どこか神聖さを覚えてしまう。

白銀に煌めく髪からは純粹さを感じ、輝く黄金の瞳は太陽を連想させ、幼子のように甘く、女性のように整った顔立ちからは穏和な印象を誰もが抱く。とはいえ、やはり都会に馴染んだ分と、半分は人の血が流れている彼の服装は、見れば若者以上に仕上がっている。

中学生の平均程度の体格を黒一色、ラインを朱のライダースで纏め、ジャケットの背中には白い四尾の狐が牙を剥き出しにしている刺繍が目につく。その様は彼の背を守護しているかの如く。または彼の内面の強さを誇示しているよう。見る者の心に深く刻む。そんな刺繍だ。

良くも悪くもバイク乗りのイメージを浮かべるだろう。事実、彼はバイクを好み、愛車を走らせて神戸から此処、北海道の険しい山地へ来た。

バイクの九十九神で名はインパルスというお気楽な奴だが、烈狐丸を相棒と呼び親しんでいる。いくら九十九神とはいえ、さすがに雪山に駐車など出来る訳ないので、不満を訴えるインパルスをとある貸駐車場——稲荷大明神の御墨付きである、妖怪や八百万の神専用パーキングエリア——にとめた。

今頃はぶつくさ愚痴の一つや二つたらしめているに違いない。が、

今は自分のすべきことに集中すべき。

故に――

「オオッ！」

開眼した彼は演武を開始する。発声に合わせて蹴り、正拳、肘打ち、防御と、型を一つ一つ確かめるように、しかし機敏に且つ精密な動きをみせる。彼が拳を握れば熱が生まれ、振るえば熱風が渦を巻く。足元から波紋の広がりを彷彿させて、覇気の怒涛が雪を抜う。

> i 1 3 0 8 1 ― 2 9 1 <

演武を続けること十数分、遂に終盤へと差し掛かり、彼の動きも研ぎ澄まされ激しさを増す。そして最後に力強い踏み込みを加えた肘を突き、その反動で前方に向けて吹く風を背に受け、烈狐丸は両腕を交叉させ、最初と同じく呼吸を整える。静かに脇へと両腕を引いて、演武の幕を下ろす。

「ふいー、とりあえず演武は終わったつすね」

何時の間にかかいていた汗を手の甲で拭い、烈狐丸はひとり呟いた。先程まで引き締まっていた表情が嘘みたく、ほんわかな笑顔を浮かべている。

「にしても、この服装で来たのはちよつちミスったつすね」

こんなことならジャージを持ってくるんだつたなと、ジャケットを着直しながら自分の無頓着ぶりに反省する烈狐丸だった。

「まあ、来年に着て来れば良いつすか」

さてと、体操も筋トレも演武もやった。後は散歩でもしようか？後頭部に腕を組んでふらりと歩きながら思ったが、それは先程から感じていた視線への興味に飲まれてしまった。

「あの、そこの方、さっきから気になっていたんですが。オイラのやつてたの、ちと迷惑だったつすかね？」

苦笑混じりに視線の気配がする木へと問い掛けると、木が震えだし、慌ててなりを潜めていた影は姿を現した。

出てきたのは全身が毛むくじらの、二メートルはくだらない筋

骨隆々の怪物だった。ゴリラと似たその容姿を眼前にすれば、普通の人間なら茫然自失となり、次の瞬間には悲鳴を上げて逃げ出すだろう……が、生憎ながら烈狐丸は外見こそ人間の少年に見えるも、百戦錬磨の武者であり妖狐である。肝は大木よりも太い。

それよりも――

「い、いえ、僕はただ見ていただけで。あの、その」

毛むくじゃらはあたふたと何かを告げたそうだ。端から見れば踊っているように見えなくもない。おどおどしい様子から、巨体に似合わず性格は控え目なのだろうか？

こういう者に出会ったら、まずは自分からコミュニケーションを取るべきだ。相手の不安定な心を和らげてあげねば。

「オイラの名前は玉藻烈狐丸。よければそちらの名をお聞かせ願うっす」

太陽のように明るい笑顔で手を挙げて、烈狐丸は毛むくじゃらへと歩いて行く。ぴよこぴよこと歩く姿が可愛らしい。和みのある烈狐丸の雰囲気、毛むくじゃらの不信を安堵感で包み込んでくれた。「あ、はい。僕の名前は岩尾。山の神様が名付けてくれた名です」「おお、岩尾さんっすか。ふむ。力強い名前っすね。良い名前じゃないっすかっ！」

よろしくっす――と、烈狐丸は手を出して岩尾と握手を交わす。飾り気無い微笑みと、名を褒めてくれた点もあってか、岩尾はより好感を抱いた。

それから烈狐丸はすぐに岩尾と打ち解け、彼に山を案内してもらう事となった。おすすめの場所をと、湖へと来た彼ら。凍り付いた湖を指差し、岩尾は語り出す。

「ここは僕しか知らない場所だよ。滑って楽しいんだ」

そう口にしてスイスイ氷の上を進む岩尾。続いて烈狐丸も滑ってみようと試みたが、飛び込む勢いが余って、止まれなくなってしまうた。

「どわああッ！ い、岩尾さん、どいて、どいてっすッ！」

「え？ グホオッ！」

そのまま後ろから岩尾をクロスチョップ——故意ではなく、条件反射——で跳ね飛ばし、更に加速を付けて湖の端まで着きそうな所で、呑気に草を食べているウサギがいるのに気付いた。

ヤッバツ！ このままじゃあ轢いてしまっすよ！

こうなったら、無理にでも止まるしかない。烈狐丸はすぐさま拳に炎を纏い、思い切って正面の地面に叩き付けた。灼熱の炎は一瞬でぶ厚い氷地を溶かし、水までも蒸発させる。目の前の氷が消え、烈狐丸はそのまま湖の中へとダイブしてしまった。

でかい水飛沫が飛び散るなか、驚いたウサギが遁走を決め込む。

数秒後には、烈狐丸が湖から這い上がってきた。

「うっ、さっむ！」

さっさと火を灯してあつたまろう。と、その前に。跳ね飛ばしてしまった岩尾の安否を確認せねば。

湖を見れば氷の上に脚が生えている。あ、岩尾だ。烈狐丸に跳ねられ、頭から氷の上に落下したのが原因か？

「だああ！ 一難去つてまた一難っすか！」

どちらにしろ助けなくてはッ！

シンクロナイズスイミングには程遠いばた足を振るう岩尾へと、急ぎ烈狐丸は湖に向かい、再度氷地に拳を放つ。今度は炎を纏ってはいない。狙いは蒸発ではなく、湖の氷を砕く為である。試みは成功し、亀裂を描いた湖は鏡のように割れ、沈んで行く。

「だ、大丈夫っすか？」

泳いできた岩尾を引っ張り上げ、烈狐丸は申し訳ないと頭を下げた。

「いや、謝らないで。気にしてないよ。それにしても、烈狐丸さん

凄いよ。湖の氷を砕くとか……」

「ん、そうっすかね？」

「山で強い雪男達でも無理だよ」

自分は雪男であるのに、ちよつと自信無くすなあ——鬱な溜め息を漏らす岩尾の背景は、意外と敏感な烈狐丸にしっかりと伝わっていた。とは言っても、自分が非力になる訳にもいかないし、苦笑いを浮かべて烈狐丸は、今の強さへの過程を語ることにした。

「あ、あはは。いやまあ、オイラは千年ずっと修行してるっすから」「千年もッ！ 強い訳だよ。んじゃあさ、やっぱりモテるの？」

「へ？」

何故に強いのがモテる事と繋がる？

眉を顰める烈狐丸に、岩尾はその訳を語り出す。

「みんなが言ってたんだ。雪男は力が強くなければモテないって。でも僕、雪男のくせに弱くってさ」

けれども岩尾には昔から恋い焦がれている雪女がいて、どうしても彼女に想いを伝えたいと心に留めていた。しかし弱っちくて臆病者の自分では到底無理だろう。何よりも、彼女はガードが堅い。

今まで彼女に告白して断られた雪男は数知れずだ。

「毎日鍛えてはいるんだけど……今日、烈狐丸さんの修行を見てたら」

「じ、自信なくしたと？」

「うん……」

すんません——お互い奇妙な罪悪感に包まれ、沈黙に入ってしまった。

こ、このムードはマズいっすよね。うーん。何かないかな？ あ、そうだ。

閃いたと、烈狐丸の頭の上で電球が光る。

「要は強いと見せ付ければ彼女と付き合ってもらえる。ってことっ

すよね？」

「え、う、うん。多分……」

「良い考えが浮かんだんすよ。やってみないっすか？」

烈狐丸が岩尾に考えた恋愛作戦を語る一方で、事件は起きていた。
ひょうか

「電華様。電華様ッ！」

山奥の洞窟。更に奥へと続く先には大きな広場がある。いや、正確には広場というよりも宮殿と呼ぶのが正しいかもしれない。どこか中華風な造りで出来たこの部屋には、大きな氷で造られたベッドが一つ。薄い冷気のカーテンを纏い、内側を見えないようにしている。芸術品とも呼べよう美しさを持つこのベッドには、それに見合おう美しい女性が身を預けていた。

白兔のように和らげな白い肌を持つ、何も纏わぬ肢体を仰向けにふわりとした純白の髪を細指で梳くし、彼女は表情を不機嫌に染める。

『何事じゃ？ 騒々しい。妾は眠いんじゃぞ』

カーテンを開き、彼女は気怠げに身を起こす。残った眠気が欠伸となって出た。

「ちよつ、電華様ッ！ せめて薄着を着て寝てくださいよ！」

白の和服を身に付けた黒髪の男は、如何にも真面目そうな少年だ。彼女にとある事態を報告しに参ったのだが、電華と呼ぶ女性が裸なのを前にして頬を赤くし、横を向いてしまった。

人の姿をした彼女の身体は、多くの男を魅了するだろう。それだけの要素が揃っていて、初心の彼には刺激が強すぎる。直視してまともに会話が出来るはずもない。

『神の眷属のくせに、女体を前にしただけで狼狽えるでない。客人の烈狐丸を見習えよ。して、何用じゃ？』

事は急を要するのだと、ハッと気が付いた彼は、あたふたながら

も報告する。

「大変です！ 湖に封印していた雪鬼^{せつき}が、復活してしまいました！」
「なんだと？」

そんな馬鹿など、怪訝に細い眉を顰める彼女だったが、数分の思考後に軽い溜め息をついたと思えば、ひょいと氷のベッドで横になった。

「は？ あの、電華様？」

『雪鬼に近い雪の精霊達を避難させておけ、大丈夫じゃ。今回はあやつがおる』

妾の出る幕は無い。寧ろ、あいつに任せた方が良いと言っなり、冷気のカーテンを掛けた。

「あやつって、誰ですか？」

着属の問い掛けに、ニヤリと不敵な笑みを浮かべて一言、彼女は答えた。

『決まっておるじやろう。玉藻烈狐丸じゃよ』

承

深林の奥、雪を葉に乗せる木々に囲まれた丸い岩にひとり、喪服の女性が腰を降ろして夜空を見上げていた。腰まで届く蒼海の色を持つ髪を梳くいながら。

碧のつぶらな瞳には満月が映る。月見を楽しむのは日課の一つ。今宵の月是一段と美しい光を放っていた。何か良いことが起こると嬉しいのだけど……残念なことに、その期待は一瞬にして掻き消されてしまう。

突如として鳴り響く地震。

いや、地震にしては妙だ。時間をおいて僅かに揺れるこの感覚。どちらかといえば、巨大な生き物が動く時などの地響き。

次第に大きくなって、自分に近付いて来ている？

「いったい……何なの？」

後ろを振り向いた時、それは佇んでいた。

狐。雪よりも白い毛色に、大木よりも巨大な、四本の尻尾を生やす黄金の瞳の狐だ。何故、こんなところにそのような化け物が現れた？

思考と共に、彼女の口から悲鳴が溢れ出た。

『ぐっへっへっへ。お前を食べてやるっすー』

端から見たら間抜けな科白だが、雪男すら丸呑みできそうな大口に、何でも噛み千切れるだろう鋭い牙を目の当たりにすれば、そりゃあ恐怖心を煽る効果は覲面てきめんな訳で。

「いやあああッ！」

一目散に彼女は逃げ出してしまった。

「待てッ！ その怪物！ 小雪さんに手を出すなら僕が許さ——あれ？」

岩尾が草村から飛び出して現れたのは、その後だった。残ったのは巨大な狐の物怪と彼だけである。呆然と彼女が去った方角を眺めていた。

「い、行っちゃったす」

言うなり狐の身体が光を放つ。実はこの物怪は烈狐丸が妖狐の状態になった姿。妖体というものであった。人の姿に戻り、烈狐丸は啞然とした表情を岩尾に向けた。

「ベタでも、悪くないと思ってたんすけど……」

烈狐丸の考えたシナリオは、自分が雪女の小雪を脅すところで岩尾が乱入し、救い出して告白する。『泣いた赤鬼作戦』というものだった。

泣いた赤鬼は、人と仲良くなりたいたいという赤鬼の為に、親友の青鬼がきっかけを作る為の悪役を買って出るお話だが、なるほど。確かに似てはいるが、ちょっとばかり恋愛を舐め過ぎではないか？

「うう、やっぱりこれ無理だよ。烈狐丸さん」

「かもしれないっすね。うーん。やっぱりストレートに正面から告白した方が早くないっすか？」

「そそそそんなッ！ 無理。無理だつてッ！」

だから烈狐丸の案に乗ったのだと、岩尾は言葉を付け足す。確かに嫌われるかもってチキンな精神で挑んでも、失敗した時の痛手を大きくするだけかもしれない。しかし片思いで告げもせず、このまま悩むのもどうだろうか？

今の彼に必要なのは、前に進める勇氣。腹を括り勝負に賭けるべきだと、烈狐丸は思った。下手な策を弄するよりは、当たって砕けた方が幾分マシかもしれない。

「やっぱり他の作戦を考えた方が良いよ。ストレートに告白とか無理だよ」

彼の弱気な態度を見ると、より考えが固まってきた。やはりこのままではいかん。ストレートに行けと押してやろう。仮に振ら

れる状況に陥っても、自分が相応のフォローをすれば良いのだ。

よし、と決心したその時だった。

「そういうことだったのね……」

静かに、怒気の含まれた声が背後から聞こえた。思わず烈狐丸達は身震いを起こす。恐る恐る振り返ってみれば、そこには逃げたはずの彼女、小雪がいた。

何故此处に戻ってきた？ そんな疑問が彼らの脳裏に浮かぶ。

実をいうと彼女は、烈狐丸に驚いて逃げ出した時、岩尾の声を耳にしたのだった。自分を守ると口になっていた岩尾の言葉を、途切れ途切れながらも聞いていた彼女は、懸念にも足を止めて様子を見に戻ってきた。

そしたらどうだろう。すべては演技だというではないか。悪気が無かるうと弄ばれたことに変わりない。

わなわなと拳を震わせ、彼女はキツと怯えた様子の岩尾を睨む。

肩を怒らす様に、烈狐丸までもがビクツと跳ねてしまった。

「最っ低ッ！」

たっぷりと込めた憤怒を叩き付けて、彼女はその場から走り去ってしまった。

何てことだ。これは当たって砕けるよりも質が悪い。岩尾を見れば、まるで闇デュエルに負けて罰ゲームにマインドクラッシュを食らった社長みたく声を張り上げ、硬直してしまったではないか。シヨックは十万ボルトすら生ぬるい程、重体のようだ。

息が、止まっている。

「ひいっ！ 岩尾さんしっかり！ しっかりすよおおッ！」

急いで応急処置を施す烈狐丸の悲鳴が、空しく冬空へと木霊した。

「ハッ！ 夢かつ！」

カッと目を見開いた岩尾は、梃子の勢いよろしくに跳ね起きるなり現実逃避を試みる。

「夢じゃないっす。現実で事実」

現実には彼を逃がしてはくれなかった。一瞬強張った表情を見せたかと思えば、鬱々しくうなだれて溜め息を漏らす。哀れとしか言いようがない。

「元気出すっすよ岩尾さん。これは元はと言えば、こんなベタなことを思い付いたオイラが悪いんすから……」

そう、烈狐丸にも十分責任はある。ちゃんと烈狐丸が訳を話せば、謝罪すれば弁明の余地もあるだろう。だからこそ彼にはまだ、やり直せるチャンスがある。

「ちゃんと話せば分かってもらえるっす。その後で改めて告白すれば良いんすよ」

だから行こうと、胡座をかいて俯ているままの岩尾の手を掴み、

烈狐丸は説得を続けるも、彼は手を払いのけて呟いた。

「いいよ。結局僕は小雪さんとは合わないんだよ」

「で、でも」

「もう此処にはいられない。あまりに情けなくて雪男の恥曝しさ。

明日にはこの山を出て、別の山でひっそり暮らすよ」

協力してくれて、ありがとう。そう口にするなり、岩尾はふらりと立ち上がる。そして寂しげな背中を向け、彼は生い茂る森の中へと入ってしまった。

「い、岩尾さん……」

自分の所為だ。自分が余計な真似をしたから、二人の関係が険悪なものになってしまったのだ。このままで良いはずがない。責任をとらねば。まずは、彼女を捜して謝らないと。岩尾が悪くないことも伝え、彼との仲を持ち直そう。

急がねば岩尾が山を出てってしまう。

歯痒い思いを呑み込んで、烈狐丸は駆け出そうとしたが……。
「待ってください!」

唐突に頭上から呼び止められ、烈狐丸は慌てて足にブレーキを掛ける。見上げてみれば、白鳥の翼を背中に生やした和服の少年が、空を飛んでこちらに来るではないか。

「あんたは確か、電華さんの」

「ええ……眷属の真生まおです」

ふわりと烈狐丸のそばに着地して翼を引つ込めると、どこか切迫した表情を彼に向け、引き結んでいた口を開く。

「大変な事が起こったのです。由々しき事態が」

「由々しき事態？」

「雪鬼と呼ばれる、電華様が創造した守護霊が復活してしまったのです」

聞いたことがある。土地神が管理する地には、自身が創造した守護霊を番人として置くと。でも、それが復活すると何故危惧の念を抱く？

寧ろ安堵すべき吉報ではなからうか。訊けばその守護霊、過去に倒した悪鬼の邪気に蝕まれてしまい。護るはずが周りを襲う第二の悪鬼と化したのだと。雪の力を得た悪鬼は、もはや手を付けられぬ程に狂暴化し、山の神である電華と複数の精霊の力で漸く封印できたという。

湖に氷付けで封印し、何度も術式を加えて強固なものにしたはずが。今日、それも唐突に封印が弱まり、復活を遂げてしまったのだ。

内容を聞くに連れて、烈狐丸の顔色が徐々に青くなってゆく。湖と聞いて嫌な推測が脳裏に巡る。

「どうしたのですか？」

「いや、それが……多分、復活の原因はオイラにあるかと」

「はあっ？」

「えっと、実は……」

記憶を辿れば約一時間前、ちょうど岩尾と凍り付いた湖でスケート遊びをしていた時、烈狐丸は岩尾を救出する為に拳で氷を砕いた。

もしかすると、あれが原因で封印が弱まり復活してしまったのでは？
そんなことを烈狐丸から聞かされた真生は、啞然とするしかなかった。烈狐丸のミスよりも、彼が氷を砕いたことがあまりにも信じられなくて。

山の神であり、あの開拓三神の少彦名神と血縁関係にある電華様が徹底的に施した封印だぞ？ 例え爆弾を大量に投げ込もうと、完全に割れはしない強固な術式だったはず。なのにこれを砕いたという、それも一撃で。

電華や稻荷大明神が何故、この妖狐を高く買い、神という立場でありながら自身と同等の扱いをするのか不思議でなかった真生だが、今なら理由の一部が垣間見える気がした。

「責任はオイラにある以上、雪鬼はオイラがすぐに止めるっす。と、お願いがあるんすが。雪男の岩尾さんと、雪女の小雪さんを捜してほしいんすよ」

「ああ、彼らをですか？」

「お、知ってるんすか」

ええ、と真生は頷いた。小雪はこの山では飛び抜けの美女で、電華のお気に入り。岩尾は気弱な雪男で有名だが、それがツボでこれも電華の好みだ。故に電華との面識が濃い彼らは、眷属の真生も知っている。

「とりあえず。二人をお願いするっす。オイラもすぐに雪鬼を止めてくるっすから」

伝えるなりキツと烈狐丸は後ろを向いた。木々に沿った一本の獣道。この先から悪質な妖気が僅かに感じられた。感度が薄いことから、まだ距離がある。ならば善は急げと烈狐丸は駆け出す。問題は山積みだ。さつさと終わらせて、岩尾と小雪の問題を解決させねば

行きましたね……そう呟いて、遠くなってゆく彼の背中を見送る真生。

翼を広げて空へと舞い上がり、気を探ってみて、ふと彼は気付いた。岩尾や小雪のいる場所が、雪鬼のいる方向と同じということに。

「最低……最低、最っ低ッ！」

呼吸を荒くして小雪は、何度も吐き捨てるように口にする。しばらくすると、言うのも虚しくなったのか、哀しげに俯いた。

「何で……あんなことするのよ。昔はあんな奴じゃなかったのに。あんな意気地なしじゃなかったのに」

思い出が脳裏に甦る。いつも自分を引っ張り回し、いろんな所へ連れて行ってくれた彼との思い出が。わんぱくでいつも根拠の無い自信を抱えていた彼。自分が転んで泣いたら背負って一緒に帰ったあの優しさも覚えている。

それが今では見る影すら消え失せている。春に溶け逝くこの雪のように。

いつからあんな風になってしまったのだろうか？ 自分が大きくなってから、彼は自分を避けるようになっていた。周りにも弱虫呼ばわりされて、なのにはらへら受け入れる彼のみつともない様が無性に腹立たしく思えて、自分からも話し掛けることが無くなってしまった。

「……私が悪いのかな」

あの頃、自分が叱咤すれば彼は戻れたのではないだろうか？ 喪失しかけていた自信を取り戻したのでは。

少なからず、今さっき自分が彼に言い放ったあの怒りは、彼の心を支える柱を壊してしまったのではないか？

後悔ばかりが募ってゆく。

私も、彼と同じだ。彼が意気地なしなら、自分は無関心過ぎた。そうであって良い訳がないのに。自分は、誰よりも彼を――

目許に溢れてくる涙が、積もる雪の中へと吸い込まれてゆく。もどかしさが込み上げてくる。

そんな時に、また視界が揺れた。まさか、さっきの妖狐？ 一瞬浮かんだこの思考だが、それはすぐに捨て去る。感じる妖気の質があまりに悪質なものだから。唾液のように粘り気があって気持ちの悪くて、吐き気を催すこの感じは、小さい頃に一度体感している。そうだ、忘れるはずもない。この山を恐怖に陥れた悪鬼を。

「なんで……なんでいるのッ！」

氷の怨霊、雪鬼はそこにいた。彼女のすぐ真後ろに。邪魔な木々を掻き分けて、土足で入り込む強盗の様にして現れた。

転

「い、いやああッ！」

張り裂ける想いで発した悲鳴は森中に広がる。しかし届く望みはあるのだろうか？ 目の前には雪の体に氷壁を鎧にして纏う雪鬼。こいつを前にして助かる望みなど、一抹の希望さえ残らない。

忘れもしない。幼き頃、山に暮らす多くの命を喰らい千切り、すり潰し、暴虐の限りを尽くしたこの怪物を。

仁王の如き形相から覗く齒は、狼のそれよりも鋭い。烈狐丸の妖狐姿を見て異常なまでに怯えたのも、この怪物が植え付けたトラウマによるものだった。恐怖心などいざ知らずか、奴は手を伸ばしてきた。これから自分を掴み上げ、その大きな口へと放り、噛み砕くのだ。

「ひッ！」

恐怖が体を硬直させる。皮肉な話だ。雪の、冬の精霊でもある自分が、恐怖に負けて凍り付くなんて。

助けてと叫ぶことすら叶わない。諦めると絶望が心を支配する。いつの間にか、へたり込んで迫り来る手を見上げていた。

「あ……ああ……」

視界が白に覆い尽くされてゆく。

終わった——そう彼女は静かに瞳を閉じた。

時が流れる。無情にも……けれど。

来ない。彼女に訪れるはずの最期の瞬間が、巨大な手に包まれる時に感じるはずの冷たい感触が。

「ぐ、う……うおおッ！」

誰かの呻く声。恐る恐る、彼女は瞳をゆっくりと開いた。

「い、岩尾ッ！」

驚愕に目を丸くする彼女の前で、彼が、岩尾が立ち尽くして雪鬼の手を受け止めていた。

「ど、どうして？」

どうしてここにいるのか？

どうしてあんな酷い突き放し方をした自分を、助けてくれるのか？
混乱と多くの疑問が彼女の中で巡り、それは問い掛けの言葉として出ていた。

「に、逃げて！」

彼から送られる返事は、これ一つのみ。

「岩尾……どうしてなの？」

もう一度、彼女は問い掛ける。足腰に踏ん張りをきかせて、岩尾は絞り出すように答えた。

「好きだから！ 大切だから。昔から、守りたかったから。今が、その時だから……僕は」

笑っていた。辛そうな表情を無理に笑みへと変えて、彼は伝えた。彼女への想いを。嬉しさが込み上げてくる。目頭が熱くなってきた。すぐにその気持ちに応えてやりたいと、小雪の心は渦巻いた。けれど、場の混沌とした空気が、自分の想いを伝えるのに妨げとなっている。

それでも、どうにか伝えたい。自分も想いを——と、いう時に、絶望は波を押し寄せてやって来る。岩尾が受け止めているのは、飽くまでも雪鬼の右手。まだ左手が残っていて、それが彼を振り払おうとしている。

「あ、危ないッ！」

岩尾の視点ではそれが見えない。視界に捉えた彼女は叫ぶが、間に合わなかった。

真横から来た一撃を諸に受けた岩尾は、真っ直ぐ大木へと身を打ち付けてしまう。咳き込むように血を吐いて、大木に貼り付けられた岩尾はすり落ちた。

「岩尾ッ！」

急ぎ駆け寄り、彼女はぐつたりと横になった岩尾に必死で呼び掛ける。唇から血を垂らし、目に生気が籠もっていない。骨も折れているに違いない。呼吸も小さく途切れ途切れで、とても危険な状態だ。

「逃げて……」

それでも、岩尾にとって大切なのは、自分の命よりも、昔から好きだった彼女の方。だから彼は自分を犠牲にしても、彼女を逃がすことを考えていた。

「嫌よ。一緒に逃げてよ。お願いだから……」

彼女の方は、岩尾の死を望んではない。例え助かったとしても、その先に残るのは後悔だけだ。自分の言っている事は、行動は、聞き分けの無い行為なのかもしれない。それでも、嫌だ。割り切れない。だから彼女は逃げなかった。逃げられなかった。

「一緒にやなきゃ嫌だあ……昔みたいに、私を連れてってよ。ねえ、ねえってばッ！　お願い返事をしてッ！」

もはや虫の息。返事すら出来ぬ程に、体は衰弱している。けれど雪鬼からしてみれば餌。目に映るすべてが餌だ。そこに感情の移入などありはしない。

纏めて喰らってやる——などと心で発しているかのように、雪鬼は手を伸ばす。

「嫌、こないで。助けて……誰か」

誰か助けてッ！

木霊する彼女の声は、誰にも届くはずもない……かにみえた。

『烈火神破拳——焰狐ッ！』

轟きと共に空を舞う炎、次第に狐の形を模して行き、雪鬼の手に食らいつく。そして爆発。岩尾達を掴み取ろうとした手を、跡形も

無く吹き飛ばした。

「そこまでだ雪鬼ッ！ 二人へのこれ以上の狼藉は神が赦そうと——」

覇気の籠められた強い怒声。皆が振り向いた先には、彼が、玉藻烈狐丸がいた。淡く、炎を想わせる緩やかな朱の光りを放ち、静かに、しかし威圧的な雰囲気をついて、雪鬼の方へと歩を進める。前髪の影響で隠れていた黄金の瞳が、カツと鋭く浮かぶ。

「この俺が赦さんッ！」

烈狐丸を知る者でも、彼が“俺”という一人称を口にするのを耳にする者は少ない。初めてならば誰もが目を疑うだろう、本当にこれは、いつも陽気ではのぼのぼとしているあの烈狐丸なのかと。しかし、これこそが彼の本来の、少年時代から真の侍の心を父から受け継いだ烈狐丸の素顔である。

根が武道家気質である所以はここにあった。

「来い雪鬼ッ！ 貴様の相手は俺だッ！」

旋回を決めて構えに移る。弓を射るような、それでいて威嚇する獣を彷彿させる前屈立ち。威圧的な眼光が雪鬼を捉えた。

刹那、烈狐丸の姿が全員の視界から消えた。怒号が響く——雪鬼の右足が崩れ落ちた頃には、その後ろに烈狐丸が体から煙を巻き上げて佇んでいた。彼が先程までいた位置から、今立つ距離までを炎が鋭く線を引く。

紅の道が波を描いた。

「烈火神破拳——朱閃迅拳ッ！」

背中を見せたまま、瞳を雪鬼へと向けた。雄大なる太陽を目の当たりにし、眼を合わせるだけで浄化に追い込まれる錯覚を覚えるこの光華。畏怖したのか、雪鬼の顔に動揺の色が浮かぶ。

小癪な——舐められてたまるかと、悔しさが込み上げて怒りと変われば、雪鬼はすぐさま反撃の姿勢へと移る。まずは手足の修復。

自分の体を治す素材はこの気温。そして雪だ。

どうだ。この場所に存在する限り自分は無敵だッ！それを誇示するかのように、瞬く間に消滅した手足を復元してみせ、立ち尽くす雪鬼は烈狐丸を見下した。

「そういう体……というわけか」

対する烈狐丸は臆することなく、沈着冷静に場を把握する。なるほど、自分は今、この土地そのものを相手にしているのか。

ならば敢えて、受けて立とう。

内に決起を秘めて、烈狐丸は両脇を締めて丹田を中心に力を巡らせた。肩から熱気が、湯気となり浮かぶ。

『ハアアアッ！』

瞳に火が宿り、朱の妖気が黄金の光へと変化を起こす。太陽の光を想わせる金色の炎が彼の足下から円を描いて舞い上がる。次第に烈しさを増して、螺旋は竜巻へと牙を研ぐ。

『全力で、行くぞッ！』

炎が弾けると共に、力強い口調で烈狐丸が姿を現す。周りにいる者全てが驚愕に染まった。

烈狐丸の容姿が、妖狐でも人でも無い、半人半獣へと変わっている。先程でも人の姿に狐の耳と尻尾はあったが、こちらはより獣の姿へと近付いている。全身が獣毛に覆われ、首筋の体毛はマフラーを想わせる。純白の髪はより確かな煌めきを宿して、腰まで伸びていた。

尻尾の数も一尾から四尾へと変化し、鋭く、それでいて稲妻を彷彿させる荒々さを醸し出す。今まで以上の威圧感を纏い、黄金の瞳が鋭さを増して雪鬼を睨め付けた。

「な、何ですかあの姿は」

あれが、妖狐の姿だというのか？

空からこの状況を眺めていた真生は、驚愕に息を呑んだ。明らかに先程と外見と中身が別人ではないかと。

『まあ、初めて見れば誰もが驚くものよな』

「ひよ、電華様」

いつの間に自分の隣りにいたのか、電華が真生と同じ高さの木々に腰を預け、烈狐丸と雪鬼の戦いを眺めていた。闘技場に赴いた観戦者の表情を浮かべて。

「うつむ。相も変わらず美男子よのう。あの姿の烈狐丸は……惚れ惚れする」

「電華様ッ！」

思わず声がキツくなる。冗談にも笑えない発言だ。神ともあるう者が、妖狐に恋心を抱くなど。いやしかし、それ以前に気になる事があった。

「電華様。あの玉藻烈狐丸とは、本当に何者なのですか？ あの力は、もはや妖怪の枠で収まって良いものではありませんよ」

「じゃろつな。何せあやつは、全ての神を抹殺する為に九尾の狐が、目には目を、神には神をと生み出した神狐なのじゃからな。闘神す^{インドラ}らあやつとは勝負にならん」

そんな馬鹿なッ！

何故そんな怪物を、稻荷大明神が管理しているのだ？ 御し切れる訳が無かるうに。真生の疑問が顔に浮かんでいたのか、電華は意地悪な笑顔を向けて答えを送る。

「管理などと思っているならば、それは間違いじゃな。知っておるか？ あの九尾を倒したのは安倍家の陰陽師と、名高い将軍とされておるが、それはあやつ^{あやつ}の活躍無くして有り得なかった事じゃ」

人間を始め、日本全土の生物を生贄にした術式を発動させ、九尾は力を得るはずだった。しかし、それを防いだのが彼、玉藻烈狐丸と、その妹の玉藻美狐だった。

「烈狐丸はその後日本全土の危機を救っており。故に神には十分な恩を売っておるのだ。まあ、本人はそんなつもりは毛頭ないようじゃがな」

どれだけ惨い仕打ちを受けても赦し、邪悪には己の拳を以て迎え撃つ正義感。そして見返りを求めぬ純粹なその心には、ほんと天晴れよ。じゃから惹かれるものがある。神という称号は、あやつのような奴に相応しいのかもしれない——そう、電華は穏やかに呟いた。

そうして口を閉じて傍観に徹した電華と同じく、真生も烈狐丸へと視点を戻した。見れば迫り来る雪鬼の拳を、燃え盛る炎拳で打ち砕いていた。

『オオオオッ！』

吼える。覇気と共に拳に乗せ、烈狐丸は雪鬼に叩き込んで行く。正拳、回し蹴り、上中下と先を読ませぬように、常に切り替えて精密に打ち込む。あまりの攻撃速度に、軌道が遅れて生まれる。炎が切り裂くように、燃え上がる形で雪鬼に食らいつく。

喻えるなら荒れ狂う嵐に猛炎が舞う様子か。それよりも遙かに熾烈を極めるかもしれない凄まじさ。

瞬く間に、雪鬼の体が崩れゆく。雪鬼の再生能力が、まったく追いつけずにいる。

『これで、決めるッ！』

炎の乱舞が一瞬にして止まる。大地が烈狐丸の気合いに呼応し、振動が広がった。天へと突き上げた拳が烈火の如く覚醒を果たし、黄金の火柱が天を貫いた。

『受けるッ！　これが——』

瞬間的な速さで烈狐丸が火柱から飛び出し、天空から雪鬼へと迫る。

『猛炎の拳だッ！』

振り上げた拳を炎が包み込む。勢いに身を任せ、拳は雪鬼の体を貫く。

着地した烈狐丸が燃える拳を斜めに切り、猛々しく発した。

『我、邪悪滅する炎拳なりッ!』

雪鬼が眩い光を放ち、爆発を起こしたのはその後だった。

「岩尾。起きて岩尾」

目を覚ましてと小雪は哀願する。だが、岩尾の状態は芳しいものではない。絶望感に浸るように、彼女は岩尾の胸に顔を埋めた。

「う……うう、うあああ」

悲しみが涙となって溢れ出る。どうしてこうなった。どこで間違えたのだろうか。後悔が心を蝕む。苦しくて、悲しくてしょうがない。もう堪えられない。だから泣いた。

力一杯に彼女は泣いた。

そんな彼女のそばに歩み寄り、肩に手を置いて烈狐丸は優しく、宥めるように囁いた。

「大丈夫だ。俺が救う」

彼の言葉に小雪は顔を上げた。本当に、本当に岩尾は助かるのと、烈狐丸の方を振り向いて彼女は問い掛ける。

「ああ、だから少し離れてくれ」

言われた通り彼女は岩尾から距離を置いて、様子を見守る。烈狐丸が岩尾の胸に手を添えた瞬間、二人の間で金色の光が灯された。

「え、これって」

肌が受けるこの感じは、熱気？ けれど暑くなくて、寧ろ暖かい。自分の体が溶けない。雪の精の自分達には害になるはずの熱気が、何故だかとても心地好い。活気に満ち溢れてゆく。それは岩尾にもみられた。

先程まで瀕死の重傷だった岩尾が、みるみるうちに生氣を取り戻してゆくではないか。

「う……うん」

小さくうねり、岩尾の眼がゆっくり開かれた。

「い、岩尾ッ！」

「小雪……さん？」

結

最初はお互いに茫然としていたが――

「岩尾ッ！」

顰笑に染めて彼女は抱き付いた。分厚い胸板に顔を埋めてすすり泣く。そこには、確かな生命の鼓動が、温もりがあった。

歡喜の声が澄み渡る。いまいち状況が掴めずにいる岩尾。そんな彼らを、後ろから烈狐丸は腕を組んで眺めていた。

何も言葉は告げず。烈狐丸は一件落着と微笑んでこの場を去る。

『山を降りるのか？』

ふらりと、木陰から電華が現れた。背を大木に預けながらの問い掛けに、烈狐丸は振り返らず答えた。

『ああ、俺はこの山に迷惑を掛けてしまったからな』
いても余計な存在だ。それに――

『長居は無用だ。俺にはやらねばならぬ事がある』

言うなり、烈狐丸は歩き出す。悠然と、したたかに。次第に風が吹き荒れ、白い霧が烈狐丸を覆い隠した。

霧が晴れる頃には彼の姿は視界から消え失せ、熱風が僅かに雪を溶かす。その様子を眺めていた電華が数歩だけ足を動かし、ふと立ち止まる。足下には雪に埋もれた丸い膨らみがあった。

電華は顔を綻ばせ、膨らみに手を入れて、中にうずくまる“それ”を引き抜いた。

『ふふ、活心不殺か……ほんと、天晴れよのう』

彼女が掴むもの、それは手。少年の細腕だ。その下に映る者は、雪鬼となる前、この山を守護する者として生まれた精霊の、幼き頃の姿。

烈狐丸が滅したのは、飽くまでも邪気。彼を蝕む狂気だ。しかし、

内に秘めた靈気までも削る結果、靈気の質量により成長する守護精靈は、子供の姿へと退化してしまわれたのだろ。烈狐丸は判っていた。だからこの少年も救う為に、燃える拳を振るっていたのだ。

白く、電華に似た顔立ちの少年は、うつすらと瞳を開き、彼女を捉えた。

「電華様？」

『ああ、おはよう。息子よ』

彼女は抱いた。少年を強く、二度と放しはしないとばかりに。

俺はいても余計な存在だ——彼の言葉が脳裏を過ぎる。余計なものか。十分過ぎるほどの恩を売りおつて。

凜とした切れ長の瞳から、一滴の涙が零れ落ちる。感謝の気持ちに嬉しさと混ざり合い、一つ、また一つと雪の中へと染み込んで行く。

「おはようございます……電華様」

そんな彼女の耳元で、小さく、寝ぼけ眼の少年は呟いた。

市内のとある交差点。烈狐丸は背筋を伸ばしてうんと緊張をほぐす。姿も元の少年の姿へと戻っていた。

「ううんッ！ 修行も済ませたし、良いウォーミングアップにもなったっすよ」

『なあにがウォーミングアップになっただよ相棒。散々オレっちを待たせやがって』

バイクに跨りヘルメットを持ったところで、相棒のインパルスはやはり不満を漏らす。

「ごめんごめん。でも、これからの旅と闘いに備えて、新たな技を

編み出しておきたくてさ」

『んで、収穫は？』

「もち、あったすよ。新技を完成させたっす」

雪鬼に放った技を思い出し、烈狐丸は握り締める。ああ、そういえば名前を決めてなかった。どんな名前にしよう。太陽の輝きを連想させる一撃。雪が吹き飛んだあの光景。雲を切り裂いて蒼天が広がるイメージが浮かぶ。

「うん。新技の名前は、太陽蒼天拳で決定っす」

『ダッサツ！ あいつかわらずネーミングセンスねえな相棒はッ！』

「何でっすかあッ！ 格好いいじゃないっすかッ！」

『俺だったらサンライズブルーって名前にするねッ！』

「そっちだって変じゃないっすか」

『ばっかおめえ、まだこっちのネーミングの方がクールだろがッ！』

などと低レベルな口喧嘩を始めるも、頑なに拒む烈狐丸に馬鹿馬鹿しさを覚えたインパルスが折れ、結局技の名前は太陽蒼天拳に決定となった。

「んじゃあ、そろそろ出発するっすか」

『なあ、相棒。ガソスタ行こうぜ。いい加減煙ふかしてえよオレ』

キーを差し込んでエンジンを掛ける烈狐丸に、インパルスが悪態付いた。彼には燃料が入っていない。烈狐丸がエコの為に改造を施し、ガソリンの代わりに空気を利用して動く仕組みとなっている。

インパルスとしてはそれが空腹な気分を催す訳で、走れるのが良くて何だか物足りない。事ある毎に彼はそれをぶつくさばやくのだが。

「駄目っす。良いっすかインパルス。排気ガスは地球の空気を汚染するんすよ。だからガソリンは止めてエコカーとして——」

『だあああッ！ うるせえうるせえ、解ったよ。解ったからさっさと走ろうぜ、なあッ！』

やっぱり駄目か。まったく、何て石頭な相棒だよ、インパルスは心の中で溜め息混じりに呟くのだった。

「まあ、ガソスタは無理っすが。コンビニには寄りたいつすね」

『んあ？ 何しに』

抱えるヘルメットを被ると、烈狐丸は言った。

「アイスクリームを食べにつす」

『はあ？ こんな寒い時期に、んな冷たいもんをか？』

「確かにアイスクリームは冷たいっすよ。けど、アイスクリームは

――」

とっても、甘くて美味しい。そう、あの二人の恋のように、冷たくて甘い。

『アイスクリームは、何だ？』

「ふふ、何でもないよ。さ、行こう」

『んん？ いまいち納得できねえけど。ま、いつか』

グリップに手を掛け、けたたましい音を立ててタイヤは回転を始める。震えるマフラーから、ほんの少し煙が浮き出た。そしてバイクは走り出す。

遠くへ、遠くへと――

途中、草木の多い丘の上を通る頃、烈狐丸は見た。

彼らを見送りに手を振る岩尾と小雪の姿を。

「お幸せに」

手を繋ぐ二人にささやかな一言を送り、烈狐丸は行く。これから始まる。闘いの待つ世界へと。

結（後書き）

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。楽しめたでしょうか？ 今後とも、妖狐玉藻伝の本編の方も更新を頑張りますので、これからもよろしくです。もしよければ、感想をください。今後の執筆に活かしていきたいので。それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4789q/>

妖狐玉藻外伝-雪の恋路は冷たく甘く-

2011年2月19日22時42分発行